

令和6年度第2回子どもの意見反映・居場所づくり部会 摘録

日 時 令和6年8月5日（月） 9：30～11：20

場 所 職員会館かもがわ第4会議室

出席者 安保部会長、大野委員、竹久委員、木戸委員、國重委員、河野委員、永田委員、村井委員（8名）

次 第

1 開会

2 議題

次期京都市はぐくみプラン策定における子ども・若者の意見聴取について

- | | |
|-----|---------------------------|
| 資料1 | 若者団体による若者の声反映プロジェクトについて |
| 資料2 | 児童館を活用したアンケート・ワークショップについて |
| 資料3 | 子ども・若者向けのパブリックコメントについて |

3 閉会

(参考資料)

- 1 子どもの意見反映・居場所づくり部会 委員名簿
- 2-1 京都市はぐくみ推進審議会条例
- 2-2 京都市はぐくみ推進審議会条例施行規則
- 2-3 京都市はぐくみ推進審議会運営要綱
- 3-1 青少年・若者の意識行動に関する調査結果報告書
- 3-2 放課後の過ごし方等に関する調査【小学校】結果報告書
- 4 令和元年度京都市はぐくみプラン（案）に対する意見の募集について

司会	京都市はぐくみ推進審議会令和6年度第2回「子どもの意見反映・居場所づくり部会」を開催する。 本日の会議については、市民に議論の内容を広くお知りいただくため、京都市市民参加推進条例第7条第1項の規定に基づき公開することとしている。あらかじめ御了承いただきたい。 それでは開会に当たり、子ども若者未来部長 福元から挨拶させていただきます。 (福元部長 開会の挨拶) 「京都市はぐくみ推進審議会条例施行規則」第4条第3項において、当部会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができないこととされているが、本日は、8名の委員全員に御出席いただいているため、当部会が成立していることを御報告申し上げます。 木戸委員におかれましては、今回が初めての本部会の出席となる。一言御挨拶を頂戴したい。
木戸委員	(木戸委員 御挨拶) 現在児童館ではアンケート調査の集計をしているが、子どもの意見が真意からずれることがあり、説明が大変だと感じているところである。
事務局	ここからの議事進行については、安保部会長にお願いする。
安保部会長	前回も色々な意見をいただいたが、いきなり子どもの意見を聴く、反映するといっても早急にできるものではなく、プロセスが大事であると考え。本部会での意見交換を通じて、子どもの権利条約に基づく子どもの意見表明権が大事であるなか、それがどのような意味を持つのかを考えながら、皆様の各活動でも実践し、プロセスを歩んでいきたい。 それでは、議事に入る。まず、議題(1)「次期京都市はぐくみプラン策定における子ども・若者の意見聴取について」、事務局から説明をお願いする。
事務局	次期京都市はぐくみプラン策定における子ども・若者の意見聴取について、以下の資料を用いて説明。 資料2 児童館を活用したアンケート・ワークショップについて
安保部会長	大野委員から若者団体による若者の声反映プロジェクトについてご説明いただきたい。
大野委員	ユースカウンシル京都の取組について、以下の資料を用いて説明。 資料1 若者団体による若者の声反映プロジェクトについて ＜京都市長への報告書について＞

第2章のうち、若者当事者からの声については、800弱のアンケートをできる限り原文のとおり掲載する方針である。理由としては、若者の声、思いをユースカウンシルのメンバーで曲げてしまっては生の声とは言えないと考えたからである。

実際に出た意見としては、余暇活動や学校教育に対するものが多かった。例えば余暇活動では学校外で交流する場が欲しい、スポーツができる場が少なく運動ができないといったものや、学校教育ではアルバイトができない、授業の課題が多く部活動と両立できないといった校則に対する不満が多く、中学生からは学校給食が冷たいといった意見もあった。他には観光、公共交通のインフラに対する意見も多く、例えば市バスの混雑により通学のバスが十分に乗れない、電車が満員で観光客が多すぎるといった意見や、その他受動喫煙が嫌だ、といったたばこに対する意見も多い印象を受けた。

ユースワーカーからの意見については、青少年活動センターの主な利用目的、若者が抱える困難さとその背景の2つのテーマでまとめた。

主な利用目的として、センターへは余暇活動、居場所の機能を若者が求めているという印象を受けた。また、相談環境を求めているという面もあり、例えば、家族関係についての相談で仲介者としてその場にいてほしいという依頼を受けた、というエピソードを聞くなど、専門機関ではなく身近なワーカーだからこそ頼める、相談できる環境なのではないかという印象を受けた。

若者が抱える困難さとその背景としては、実際に自分が若者食堂で食事を提供しているとき、家でご飯が食べられないという話を聞くなどして、本当にこの事業を求められている方がいらっしゃるのだなという印象を受けた。

第3章では調査を踏まえた若者施策の重要な視点として3つを挙げる。1つ目は安心して過ごせる居場所と体験活動、体験活躍する機会の拡充、2つ目は困りごとを抱える若者や自己実現に向けた支援の強化、3つ目は若者の成長、活躍を支える担い手の確保、である。

第4章「若者の意見反映に向けた仕組みづくり」ではワークショップの意見をまとめる。内訳としてはまず、前提として「身近で安心できる空間づくり」を挙げ、「意見形成のための支援」、「意見の表明や対話機会の保障」、「意見の検討範囲やフィードバック及び反映結果の発信・振り返り」について記載する。

最後の第5章では、取り組みに備えた当団体のメンバーの所感や次期プランでの期待をインタビュー形式でまとめる。

安保部会長

事務局及び大野委員からの説明について、御質問や御意見などを頂戴したい。

竹久委員	今回、ユースカウンスル京都において、ユースサービス協会や青少年活動センター職員（ユースワーカー）と連携し声を集める取組をされたが、ユースサービス協会としては、若者の声を聞くことは日常から大事にしているところである。日常的に関係性を持った立場だからこそ聞ける場面もありつつ、逆に同世代の若者自身だからこそ聞くことができる部分もあり、それらを併せて実施できたのは、良かった。 最初は、双方に遠慮しているところもあり、日常の関係性のあるユースワーカーをもっと活用できるといいのではと話したこともあったが、結果的に両者ともに連携し、大野委員には事業の中にも入っていただきながら声を聞く取組をしていただいた。なかなか全員に対してしっかり関わることは難しいが、そういったこともしながら聞き取っていただいたので、ある程度は生の声を聴けていると思う。また、浅いと感じられる意見なども混在しているように見えるが、子ども・若者の声は、色々なレベル感で在ると思うので、それを何らかの選別をせずに聞き取ったこと自体に、私自身意味があったと感じている。 ちょっとした意見であり、それ自体はプランに反映されないかもしれないが、ここで聞かれたこと自体に意味がある。青少年活動センターの中で反映できることもあり、一緒に取り組めたことはすごくありがたかった。 一方で気がかりな部分として、どうしてもこういう調査では仕方のないことだが、青少年活動センターで聞ける層が中心になってしまうので、それ以外の層はどうなのだろうというところもある。枠組み的にも仕方ないことではあるが、今後に向けて、青少年活動センターに来ていない多くの層に対してどうするのかということを考えていけると良い。
大野委員	竹久委員が様々なレベルの意見を広く聞けたとおっしゃっていたが、確かにすごく色々な意見があったと感じている。例えば、山科で意見聴取したときに、中学生は好きな人のこと好きピって呼ぶらしいが、好きピに京都駅で置いてかれたみたいな意見もあって、意見を引き出す難しさを感じた。中学生にどう説明したらいいのか。困りごと、モヤモヤは何かない？と聞いても少しずれた意見を言われることもあった。そこで職員から、困りごととして聞くのではなく聞き方を変えたら良いとアドバイスをいただいた。例えば、「10年後 20年後、京都市に住みたいか」という質問を投げかけ、住みたくないと答える人にその理由を聞いてみることで、電車や市バスのこと、居場所がないから、といった意見を聞くことができた。聞き方1つ変えるだけで、若者たちも答えやすくなり、すらすら書いてくれたので、聞き方は難しいと感じた。 あと、紙媒体のアンケートも大事だが、一番大事なのは会話であると思う。何気ない会話から実はこういうことに困っているという話に発展することがとても多かった。話を進めるなかで、実は学校の部活の道具が古すぎて十分に練習ができないといった話が出てきたりと、ちょっとした会話

	から大事ではないかと思う意見もあり、対話が大事だということをこの取組の中で感じた。
安保部会長	何気ないことを聞けるということは実はすごいことで、普通の会話ができるようになった後に、できるようになる話題もあるだろう。
木戸委員	児童館ではアンケートを取り始めているところだが、大野委員と全く同じ感想を抱いているところである。 子どもに居場所と言ってもそれがなかなか伝わらなかったり、アンケートでおばあちゃんの家が居場所と答えた子が、アンケート後の会話の中で児童館を居場所と感じているのでは？と思うような発言をしたりする。児童館は子どもたちにとって当たり前の居場所すぎて、児童館が居場所と答える子どもが、修徳児童館の場合は少ないようだ。 結果として出てくる情報は大事である一方、やはりこの取組をしていること自体にすごく意味があると感じている。小学生は年齢層に幅があり、アンケートに答えている度合いは様々だが、そこで話されたことによって気付かされることがたくさんあり、会話を通じてアンケートに表れていない本音に触れる機会になっている。 子どもはそのときに思ったこと話しているが、意見はすごく長いスパンで聞いていかないといけないものだと感じている。今、児童館を利用していた子どもが成長して、自分がぐれずに大きくなれたのは、館長や先生に話を聞いてもらったおかげだから、夏休みは恩返しをするといって子どもたちと児童館で遊んでくれている。中高生時代に児童館によく来ていた若者が、今も時々児童館に来ているが建築家を目指している同学年のアルバイトの子の制作物をみせてもらって感動していたときに、「昔ゲームばかりしていた時間はどう思う？」と聞いてみたところ「そやな～」と振り返っていた。そんな話は中学生のときに絶対できなかったが、大人になってやっとできる会話があるのだと感じた。大野委員が発表された色々な箇所共感を覚えている。 集計が大変になるのでタブレットを使用してアンケートをしようと提案したのだが、高学年は自分1人でできるものの、1年生は職員がずっとつきっきりで取り組んでいる。でも、それが面白いところでもある。
國重委員	今回のこの取組については、連盟全体として京都市と取り組んでおり大変ありがたく思う。先ほど、事務局から現時点で1,890件ほど回答を集めていると報告があったが、連盟の方に紙媒体で200件位集まっており、2,000件を超えていると思われる。 今回の調査については、アンケートとワークショップという2段構えの構成をとっている。アンケートではどこが居場所か、そこにどういう魅力を感じるか、居場所がない場合それはなぜか、居場所って何なのだろうと

	いうことを聞いている。数としてはまだ中盤であるので、もう少し集めたい。 大事なことは、アンケートで広く浅く意見を取っているので、集計、分析を通じて、ワークショップで深い内容を集約できればと思う。 ワークショップの開催箇所については、7ブロックの地域があるなか、小学生で9か所、ブロックを超えて中学生で1か所、計10か所を現時点で予定している。 今回ありがたかったのは、児童館職員が改めて子どもに意見を聞く機会を持つことができ、今回の取組を通じて意見を聞く大事さを再認識できたことだ。 またワークショップのためにファシリテーションの研修会を開くということで、子どもにも児童館にも職員にとっても良い取り組みになりつつあると感じている。ワークショップでは子どもたちの意見をアンケートからより深め、本音に近づけたものになればと思っている。
永田委員	もしこのアンケートをこども食堂ですとなると、こども食堂の場合、食事を渡すだけの場所もあって、取りに来る人が必ずしも子どもというわけではないため、細部は確認できずお渡しするということになる。そうすると少し趣旨から反するようになる。 時期的にアンケート実施ではかみ合わなくなってしまうが、11月にこども食堂が一堂に会するイベントを予定しており、そのようなイベントにブースを設けて、例えば声を聞く場を設けたり、集計結果やプランの策定を報告する場にしても良いように考える。
安保部会長	声を聞いた後に、それを伝える場も大事である。
國重委員	青少年活動センターでの取り組みと同様、児童館に来ている子どもが対象になるため、来ていない子どもの意見をどう聞くかということがやはり大きな課題である。
安保部会長	その点からいうと学校は就学期の子ども全員と繋がりのある場所であるが、河野委員はいかがお考えか。
河野委員	アンケートの難しさを感じた。子どもたちの経験は多種多様であり、例えば学校外の図書館に行ったことのある子と無い子では経験値が異なり、行きたいという願望も含めたアンケートになっていると思った。また子どもは比較ができないので、こちらが期待するよりも視野が狭い範囲での回答になると思う。遊園地に行きたいといった一部の情報で回答する子も多くいるだろうから、紙での回答だけでなく、しっかりと対話をして声を拾い上げるのはすごくありがたいことである。

村井委員

今回のアンケートやワークショップも全てそうだが、最終的にプランに反映させようと思ったときにはごく一部の範囲でしかない。やってみてこういう聞き方がよかった、この項目ではない方がよかった、出てきた答えに対して何か返した後、別に新しいことが生まれたなど、ある意味、声を聞く練習のステージぐらいでしかないと感じる。これをもって、プランを改訂したとしても、あまり変化がなく、出てきた声のどこを政策に反映させたらいいかわからないだけになりそうな気がするので、こういうことを取り組みながら、自分たちもどんどんレベルアップしていかないといけない。

先ほど永田委員がイベントで声を聞くという話をされていたが、ここから先は常に聞いていくという流れをどう作れるか。若者の場合、児童の場合はどういう場面で聞けるか、学校では普段アンケート取っているからその活かし方を考え直そう、といった施策に反映させるプロセス作りをこれからしていかなければならない。

今回改定したプランを毎年評価するときの情報として、1年間貯めた声を使って評価するのが良いと感じる。短期で無理やり集めてもいい声しか集まらない。常に声が集まる仕組みを作っている自治体も出てきており、習慣化がまず必要である。

出てきた声の答え方についてだが、例えば、これが足りないといった意見が多く出たなかで、実はこういう施策が既にあるという状況になったとき、恐らく対応として、広報が足りないという結論ばかりになってしまう。竹久委員のような、出てきた意見に対して、スパイスを足せるポジションの方がいないと、知らない若者同士で話して、「知らない」で終わってしまう。聞く側の責任としてフォローをしないと、若者の言ったとおり実施してみたがうまくいかなかったと若者の責任にされてしまう。大人の責任としてフォローをしていく仕組みづくりがある方が良い。

また、声を聞くということは、子どもの権利の話から来ていることだと思うので、子どもの権利に沿っているかどうか聞かないといけない。子どもに意見を聞くと大抵「これをして欲しい」という話になるが、それだとただお客さんを作っているだけでしかない。子どもの主体形成も図っていかないといけないので、子どもが権利を自ら発揮するには、して欲しいことを表明するだけでなく、自分がしたいことを実現するにはどうしたらいいのか、というチャレンジの場に対しての意見がもっと増えていくような、例えば、ワークショップを経験するといったことが必要になるかと思う。

余暇の話になると、こういう場がないと言われ、ではいざ作っても誰も来ないという困った結果になる。各小学校区で作るのかというと作れないわけで、無いところは無いなりの工夫をしないといけなくなり、それをどうするのかという話になってくる。

	地域差の話でいうと、例えば、山科では好きピの話は出てきても、観光の話は出てこない。市バスが走っていないから、観光客に対してバスに乗れないということは思わない。どこで出てきた意見なのか地域差として議論しなければいけない。 先ほどの好きピの話については、面白い話という一面もあるが、一方でデートDVの側面もあり、若者の中でまだこのようなことが起きているのだという問題意識として、施策にどう反映するかの変換を大人がしていかなければいけない。 また先ほど受動喫煙の話もあったが、ワークショップの中では、将来的に実現したら良い話と、健康被害の話、交通問題、早く解決すべき問題と今すぐできる話、みんなで議論しながら文化として作っていこうという話と分けて取り組んだ方が良いと思った。
安保部会長	この部会の設置目的もとにかくやっていきましょう、私たちが子どもたちに声を聞いて、子どもたちに返していく、子どもたちと一緒にどうしていくかを考えるところにあり、その観点から御意見をいただけたかと思う。 時間の都合上、現在進行中の取組についての議論はここまでとして、次に、子ども・若者向けのパブリックコメントについて、事務局から説明をお願いする。
事務局	以下の資料を用いて説明。 資料3 子ども・若者向けのパブリックコメントについて
安保部会長	子どもたちが必ず関わる学校で協力いただけるということだが、河野委員から御意見いただけるか。
河野委員	事前に事務局から説明を受けていたが、すごく良い経験になると感じている。やはり対象は高学年になるかと思うが、例えば6年生の社会科の公民分野で子どもの意見を反映しながら、各自治体がより良いまちづくりのために色々な取組をしているという勉強とリンクさせて、では自分たちが社会の一員として何かできないかという点から協力、勉強をする良いきっかけになると思う。 先ほどのアンケートの話で、項目を設定する難しさを感じていたが、やはり子どもがアンケートに取り組むためには説明を指導者がしないと難しく、また、指導者がそれぞれでバラバラな説明をすると子どもたちの回答にも影響を与えるので、アンケートをするにあたっての、指導者への説明資料が欲しいと事務局に伝えているところである。保護者向けに配信をするとどうしても子どもからの回答を得難いので、社会科や学活の時間を使って授業の一環としてできたら良いと個人的には考えているが、やはり授

	業時間を削るという面もあるので、校長会で検討したうえで、できる限り多くの意見が集まるように実施できたら良いと考えている。
安保部会長	先生方には、お忙しいなかで負担をかけてしまうことになるが、子どもにとって一番大事な場所といえる学校で、このような取組が根づくことが必要であり、その1つの手がかりになればと思う。 保護者向け配信のすぐーるではお知らせが色々と流れてきて、保護者の方はそこから見るものを選択されているということか。
河野委員	学級だよりなど色々と配信している。
事務局	周知自体は、すぐーるだけでなく、通常のパブリックコメントと同様、児童館や青少年活動センターを含めた色々な場でさせていただく予定である。その中で、学校での取組として説明させていただいた。
大野委員	学校は一番大事な場所だと思う。青少年活動センターや児童館は利用する人が限られている中、学校は大半の子どもが出向く場所で、声が溢れている、魅力的な場所である。そこで取組ができるのは一番良いことだが、やはり一番の懸念としては学校の先生の負担がある。人員不足のイメージがあり、以前、小学校の先生と話をする中で、家に帰ってもずっと仕事をしていると聞いたので、そこに負担をかけてしまうのは悪影響だと感じる。行政や何かしら外部からサポートできる制度、仕組みがあればより多く活用できるのではないかと思う。
安保部会長	この資料は子ども向けであるが、若者に対しては従来どおりのパブリックコメントを予定しているか。
事務局	従来どおりの大人向けと子ども向けで分けているが、子ども向けのもので大人が回答しても問題ない。
安保部会長	若者に取組を知ってもらい意見を書いてみようと思ってもらうまでが大事だと思うがいかがか。
大野委員	若者でパブリックコメントに参加しようとする人は少ないというイメージがあるので、どう認知してもらうか、これを答えるメリットが何なのかを伝えることが大事だと思う。
安保部会長	前回パブリックコメントにおける若者からの意見はいかがだったか。

事務局	全体 538 人のうち、30 代以下の割合が大体 50%程であった。先ほどの児童館でのアンケートは 1,890 件で膨大な数字であり、もし、今回こういった形で協力いただいて 10 代、20 代からの御意見の数が増えればとてもありがたいところである。
安保部会長	前回のパブリックコメントでは、大学の授業を持たれている委員の方に募集の協力をいただいていたと記憶しているが、村井委員からその点について伺いできるか。
村井委員	授業時期や授業テーマと合っているか次第だと思う。大学は大学の中で授業アンケートを学期で 2 回程しており、学生は授業を受けにきているので授業内容と全く違う内容のものだと、それ先生がやりたいことですよね、と思われてしまう。合う授業でないとなしい。 また、内容を全部読まないコメントしづらいのは負担が大きい。従来パブコメとして全体に対して意見をもらうものとは別に、期間の中で重点 5 ポイントを分けて、これについてどう思いますか、だけのものがあっても良いのかもしれない。今回だけでなく、年間で常に聞いていって、5 年後ぐらいには全部終わって見直しができますといったようなものも 1 つかもしれない。
竹久委員	テーマを絞ることは良い。パブリックコメントは渡されただけで意見をしようとはなかなか思えず、意見をするまでに段階がある。 まず興味を持てるかというハードルがあり、次に内容の意味を理解できるかというハードルがある。今回のプランに係る取組の初期段階で、ユースカウンスルへプランについて意見が欲しいという話をされる場面があったが、いきなり言われてもそもそもよく分からないと感じていたようであり、まずは分かるためのプロセスがやはり必要である。 アンケートの話でも言われたが、対話する機会が必要と考える。対話型パブコメをテーマごとにすると参加もしやすくなるだろう。自分の関心のある部分だけに対してのコメントを、その場で書いてその場で出すことができれば、一連の流れが一体となって少しやりやすくなる。 全部をまず理解するところから入らないといけなはハードル高く難しい。機会を作る大変さはあるが、対話の場づくりなど、何か可能性が考えられると良い。
村井委員	この際、10 代、20 代の割合が一番高くなって、大人たちに見せつけても良い。子どもがこれほどコメントしているのに、少なくとも専門職が答えられないのはおかしいと思う。子どもたちがこんなに意見を出しているなか、あなたたち何しているのかといった状態にまず持っていくのも 1 つだろ

	う。政策に使えるような意味のあるコメントは少ないかもしれないが、多数の子どもが取り組んだという事実は大事だと思う。
安保部会長	今年度中にプランを作る必要があり、日程に限りのあるなか、すぐにテーマ別パブコメや対話型パブコメをするのは難しいと思うが、今後の評価の部分などで取り入れていけたらと考える。
國重委員	この資料では子ども向けということでルビがふってあるが、児童館で取り組もうと思うと少しハードルが高い。表現が難しく、抽象的な表現や概念が多く含まれていて、例えば「反映する仕組み」は職員が説明しないといけない。また高学年が対象ならば、全部ルビがあるのも少し違和感がある。ターゲットをはっきりさせた方が良い。
事務局	今回の児童館のアンケートは、高学年をターゲットとした表現としている。子ども向けのパブコメにおいても表現も含めて内容の精査等を進めていく。 対話型パブコメという案もいただいたが、小学校で実施いただくにあたって、先生向けの説明要旨や進行例を作成して、子どもに趣旨を伝えながら実施することを検討している。村井委員から重点を絞って聞くというアイデアもいただいた。子ども向けのパブコメでは、5つの重点に絞っているが、さらに絞る課どうか、可能性も含めて検討したい。
國重委員	児童館のアンケートでも、実態としては子どもに職員がついて説明をしていることが多い。
安保部会長	最初の試みなので、やってみないとわからないことが多い。なかなか行政がやることで冒険は難しいかもしれないが、やってみることも大事かと思う。
永田委員	対話型パブコメでは効率よく声を集めるのが難しいものの、質を担保できるのは良い。こういったプランは策定までに期限が課せさせられていて、その中で意見を取り切らないといけないため、業務量のボリューム、調整に難しさがあると思う。プランの中に子どもから意見を引き続き取っていくと書くのが一番いいのではないかな。
村井委員	声を聞くことは法律上、年間を通じてすべてでやらないといけないことであろう。
安保部会長	声を聞くことは、今後継続していかないといけないが、今の社会ではその仕組みができておらず、仕組みをどう作っていくかに課題がある。試行

	錯誤の段階にあるので、今年度の日程や業務量の制約の中で、できる範囲で、今までよりも1歩踏み出していくことになるだろう。 あとは、できるだけ子どもたちの理解に合わせて聞いていくことが課題になると思う。パブリックコメントの時期はいつ頃か。
事務局	11月の中旬以降1か月程度を予定している。
國重委員	子どもの意見を十分に聞いて決めていく仕組みがまだ社会できていないので、色々な取組を通じて大人も含めて練習する期間だと思う。
安保部会長	こども基本法の中に、子どもが権利の主体であるということが明確に書かれたのは、意義深いことであり、それをどう実現していくかというところに課題があると思う。
木戸委員	政策に活かすところまでを目指すと、本当に難しい。子どもに意見を求めても考えが至っていない段階にあると思う。今、大人が大事にしないといけないのは、こういった社会になってきているということを社会全体で理解することだと思う。具体的にこれを作るというものではなく、社会全体の理解を進めるための政策でいいのではないか。聞いてもらった経験、一緒にした経験、自分のしたことが形になった経験をしていかないと、「できた」経験がなさ過ぎる。初めからどうせ言っても無理だろうと思ってしまう人たちもたくさんいるので、そういう機会を増やすための体制を、大人も作っていくことが政策になっていかないと、子どもの意見が本当に届くというしくみまで難しいと思う。即政策は難しいものの、その社会を作っていくという段階は子どもにとっても大人にとっても大事である。福祉的な困りごとを抱える子どもに対して変化をもたらせる部分は一定あるかもしれないが、普段の生活の中では経験を増やすことが一番大事で、意見として出てくるのもそのあとになるだろう。 子どもの未熟さ故の部分もあるが、子どもの意見を大人がかき消していないかという問題もある。 以前、当法人の苦情に関する第三者委員会を開いた際、親からの苦情は挙げられているが、子どもからの苦情はないのかと問われたときに、日々その対応をしているにも関わらず、私自身の中にそれを苦情として挙げるという意識がなく、反省していたところであった。そういう段階から始めることになるだろう。
安保部会長	大人も慣れていないなか、解決に至れるものかはわからないが、子ども若者と一緒に考える仕組みづくりについて検討できるのではないかと思う。将来的には日本の子ども若者支援に関する社会全体のシステムや仕組みについて取組が進められると思うが、諸外国の色々な事例があると思わ

村井委員	れるので、そういうことも参考にしながら、京都市で市民に身近なところから出来ることがあるのではないかと期待ができる。京都市には専門家が 多くいらっしゃり、やりやすい場所ではある。 今の御意見をプランに書いてはどうか。声を聞きました、以上、ではなく、聞く中で大人も社会の中でトレーニングすることがしっかり書けていたらよいと思う。5年間の中で日々積み上がっていくことが書かれていたらよい。 今、全国で急に意見を聞けという状況になっているなか、恐らく無理やり聞いているか、聞ける人から聞いているか、またはホームページを立ち上げて一斉にSNS等を使って情報収集しているというパターンしかないだろう。聞いてどうするのかという話だ。聞いた情報を処理できていない。また、聞いた情報が子どもや若者を代表していない可能性が高いという難しさもある。今チャレンジしている方法を進めながら、皆で意見を出しながら頑張っていくことがしっかりと書けたら良いのではないかな。 アライバイ型で子どもの声を聞くことが多い。聞きましたよ、というポーズで意見を聞いている面が大きいけど、そろそろ社会としてそれは卒業した方が良いでしょう。
竹久委員	本来、プランのために声を聞くものではないはずである。子ども・若者の権利は政策反映の話だけではない。日常の中で意見表明されたうちの、今回プランに使う分はこれだととらえやすいが、それ以外の多くの意見についても日常の中できちんと反映されているか否かが今後も常に問われていくと思う。今回はプランへの反映に焦点化されているところがあるが、本来、子どもの権利保障の話であると考えれば、5年後、子ども若者の権利がきちんと日常で保障され意見反映できるようになれば、京都で意見反映が進んだということになるだろう。意見表明の一部分だけにとらわれないように、私たちも考えながら進める必要があると思っている。
安保部会長	子ども若者に関わる大人だけではなく、関わらない全ての大人も理解していただかないと、子ども対高齢者のような世代間の構図になってしまうだろう。子どもの政策が先か後かという問題ではなく、社会全体のために必要だということを理解してもらえよう表現が必要になるだろう。 それでは、本日の審議はこれで終了し、事務局へ進行をお返しする。 (事務局より今後のスケジュール等の説明) 以上をもって、第2回「子どもの意見反映・居場所づくり部会」を終了する。